

平田道憲（広島大）

目的 夫婦の一週間の労働形態が夫婦の生活時間配分に与える影響を明らかにする。一週間の労働形態として、週間就業時間および週休制度に着目する。有職の夫と妻の場合は一週間の労働形態が本人に与える影響を、専業主婦の場合は有職の夫の週間労働形態の影響を分析する。

方法 総務庁統計局が実施した平成3年（1991）社会生活基本調査のデータを研究目的にあわせて加工し、比較分析する。

結果（1）週間就業時間の長い夫の週一日あたりの生活は、睡眠時間、自由時間が削られている。しかしながら、家事労働時間は、週間就業時間の長さにとほとんど無関係である。妻の場合、週間就業時間が長いと自由時間と家事労働時間が短くなっている。自由時間については、短時間労働の妻と長時間労働の夫の時間がほぼ等しくなっている。

（2）週休一日の夫と完全週休二日の夫の生活時間を比較すると、週全体の労働時間は完全週休二日の方が短い。しかし、平日の労働時間は、とくに雇用者において、完全週休二日の方が長い。完全週休二日の夫の土曜の家事労働時間は週休一日の夫より長い。妻の場合は、完全週休二日の方が平日の労働時間も短い。

（3）専業主婦の場合、夫の週間就業時間が長いと睡眠時間、自由時間が短く、家事労働時間が長い。夫が完全週休二日の場合、土曜の家事労働時間は夫が週休一日の妻よりも若干短いものの、平日、日曜の家事労働時間は長く、週全体の家事労働時間は夫が完全週休二日の妻の方が長い。